

# 感覚運動学習におけるモルフォロジー的研究

金 子 一 秀

## 1. 本研究の問題意識

我々が運動を対象として研究していく問題圏の中で、運動を正確により早く習得することへ導く立場は不可欠である（文献12・27頁）。この研究領域のなかで実践と特に密接なかかわりを持つのが運動学習であることはいうまでもない。この運動学習とは人間の身体運動に関する学習として、運動心理学の分野で多く取り扱われている（文献17・127頁）。この心理学において扱われる学習理論は、アダムズの閉回路理論に代表されるようにサイバネティックス的な考えを導入している（文献17・136頁以降）。しかし、この学習理論が人間の運動学習の全てをとらえているとはいえない。このことはシュミッツによって批判されているが、サイバネティックス的運動学においては、運動習得への欲求、意図、予測、動機をもつ主体としての人間を基礎づけることはできないのである（文献24・S. 35）。それは、人間の運動とは自ら動くものであり、力学的法則によって動かされているのではないからである。つまりワイゼッカーのいうように、「自ら動いているから生きているのである」（文献26・31頁）。この自ら動いているという自己運動を短絡的に客観化することにより自己という言葉は取り去られてしまう結果になる。従ってサイバネティックス的な学習理論というのは、人間の運動学習のある一面を分担しているだけにすぎない。しかし、このある一面もゴールドシュタインのいう人間性を全体として研究する上での前提からは大きく外れていることになる（文献6・15頁）。このサイバネティックス的な学習理論と並んで、ここには現象学的な考察をもとにした学習理論が前景に立てられるべきであろう。運動の学習理論は当然人間性全体を見失うことなく進められなければならない。このためには人間というものを外から観察するのみならず、その人間の中に入り込む作業をも必要とする。このことはマイネルの提唱したモルフォロジーと軌を一にする（文献15・44頁）。本研究においてはマイネルのモルフォロジーを足場にしながら、さらに現象学的モルフォロジーの立場をとることになろう（文献10・S. 104 ff.）。本研究は運動の可視的現象と本人の感覚運動性との対応を明らかにし、運動の共通感覚的な構造体系の構築に資そうとするものである。この考察を進めるに当たり、第一に問題となるのが運動者の感覚へ入り込む作業である。この作業には、運動者から発せられる言語の現象学的考察がまず前景に立てられることになろう。

## 2 運動学習における言語の意義

我々人間が動物と決定的に区別されることは、言語を持つということである。この言語につ

いてアリストテレスは、「有利なもの有害なもの、また正しいもの不正なものを明らかにするため存在するものであり、決して声のようなしとは区別されなければならない。」(文献1. 7頁)と述べている。我々は日常生活において、この言語を持って共通理解を深め、意志の疎通ができるのである。運動学習においても、マイネルのように、この言語というものは、自分自身、さらには前の世代の運動経験を保存し、スポーツの諸技能を新しく身につける時間をどんどん短縮してくれる特性を持つ(文献18.S. 344 ; 371頁)。この言語を無視して、運動を学習することは、動物と人間の界をなくし、むしろ、動物の調教と同じレベルになってしまうことは自明のことであろう。人間が人間として運動を学習する前提は言語の使用を許されるということである。残念ながらこのことは、特に競技における運動学習では、一般に受け入れられにくいのが現状であろう。というのも、そこで運動者がある意志を持ち、言語を使うようになると、表向きに現れる現象発話のみでは本当の指導はできなくなってくる。この言表にある誤解を持ち、例えば、それを生意気と解釈した指導者は、本人の意志を剝奪し、言語の使用を禁止してしまうことになる。そしてひたすらに量的反復を命じることにより、選手の身体に新しい反射を植えつけようとする。このようなことは現在の日本では、さほど珍しいことではない。何故このようなことが平然と行われているかというところに運動学習の問題性が潜んでいると考えられる。

運動を学習するということは、まず、その対象となる運動がとらえられ、そこに目標像が存在する。基本的には、目標像を達成することが全てであり、それ以外にはなにも入る余地がないように思われる。いわゆる“できればよい”ということになる。どのような経過を辿ろうとも、“できる”ということに最終的、最高の価値が置かれるのは否定できないことであろう。特にこの問題がはっきり浮き彫りにされるのが採点競技である。採点競技においては、“できる”ということは、量的な判断でなく、質的な判断を要する。つまり“うまくできる”ということが問題となる。この“うまく”という現象は、技術面、リズム面など多くの視点から考察できるが、その価値は不変的なものではない。つまり時代に沿って流れて行くという認識が前提になる。この、絶えず流れる価値観のなかで、また進歩して行く技術のなかで対応できる能力を身につけさせない指導者は、はたして成果をあげうるであろうか。つまり、その運動の目標像を固定的なものと捕え、その価値観が変わらないことを前提に調教に終始する。このことにより、被害を受けるのはまさに選手たちである。次の時代に対応できる能力も無く、競技の世界から脱落してしまうのである。運動を表す言語を持たずに、自分の内観との照合もなしに習得された運動においては、運動経験が残らず、最後に残るのは、挫折感のみである。このことから、指導者たちは、言語の使用を禁止するどころか、むしろ言語を使用させなければならないのである。運動の内観にとっても、修正のときでも、言語というものは絶対不可欠なものである(文献18.S. 361 ; 390頁)。ここにおいて、さらに言語というものの、特に運動における言語の特性が明らかにされる必要があろう。

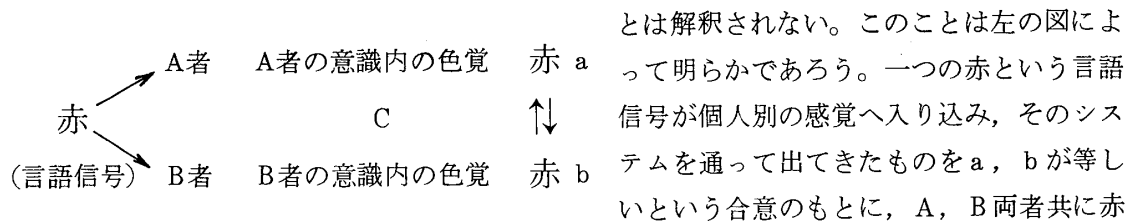
### 3. 言語の対応関係

言語が、教育の所産であることはいうまでもない。この言語は、ナイサーのいうように大き

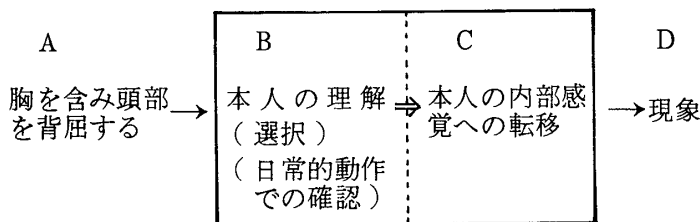
く二つの側面をもつ。「一つは、現実存在する事象に対しての発話であり、もう一つは、内観、イメージに対しての発話である」(文献20.165頁)。後者における内観、イメージなどに対しての発話については、教育の所産である言語によって発話される限り、非常に稚拙なものになってしまう。特にイメージに関しては、過去の知覚経験の組合せから出るもの以外のイメージ、つまり全く新しいものの創作に関しては、その過程を言語によって発話できるかどうか疑問となるからである。しかしこの問題は、本論の射程を越えるので割愛せざるをえない。言語には、必ず、言語と対応する現象というものが存在する。我々の会話も、その共通性の中で、ある理解を持って行われる。この共通性を持たせるのが、いわゆる言語教育なのである。各々が知覚したことに勝手に言語をつければ、共通性は失われ、一つの社会における意志疎通すら不可能になってしまう。この言語教育の現実の姿では、坂本のいうように、例えば、蚊に刺されて、「痛い」という子供に母親は「痒い」といえと強引に訂正させる(文献23.58頁)。つまり、意味よりも使い方が中心となる。このような過程を経て我々は、言語にある最低限の共通性を維持することができる。この意図的に作りあげた共通性の中で、その意味内容の本質が問われるとき、我々は、言語というものの大きな問題に直面する。我々の言語教育は、本人の知覚したものを無視し、他者が勝手に決めつけてしまう強引な作業であることに気付く。先に挙げた例は、蚊に刺されるとは「痒い」に決まっているという先入観から、「痛い」という言語を訂正させるのである。しかし、このことについてシュトラッサーは、ノエマの側面から考察を加え、「ある現象に相互に比較しうる諸状況が存在しないならば、その現象は自分にとって存在しないのである」と述べている(文献25.96頁)。つまり、自分の経験が自分の共同存在者たちによって、いつも同じ記号で指示されるという事実によって、自分の諸経験は現実かつ妥当なものになる。しかし、我々の関心事は、ノエシスの側面であり、ある知覚した現象の意識の志向性なのである。つまり本人がどの程度、どのように痒いかということが問題の中心となる。痒いという現象にさらに詳しく立ち入ろうとすると、一体その現象を表現する言語を我々はいくつ持っているのだろうか。とくに、この問題が浮き彫りになるのは、医者の世界である。医者は、その人の症状をより深く知ることにより、さらに正確な処方ができる。医者がまず問診することは、医者の知識を血肉化するための第一の作業である。このことは、運動学習においても同様な問題となる。運動を学習する際、本人が一体どのような感覚で行っているのかが全くわからない場合、指導者の知識はなんらの役にも立たない。ここでも指導者と学習者の間を結ぶ第一の作業は問診なのである。マイネルのいうように、「現実となんら関係のない空虚な形式的な言葉は全く役に立たないのである」(文献18.S. 361; 390頁)。この日常使われている言語と運動の言語との間には、その認識過程に大きな差が生じてくるのである。

#### 4. 運動学習における言語の問題性

ある知覚したものを表すのに言語が使用される場合、その確認には、「選択」という形で認識形態が成立する。例えば、「赤」という語の使用規則を意識内の私的な色覚とは無関係に同一の色見本を示すという形で「選択」が成立した時、お互い「合意」として解釈できるのである(文献23.68頁)。このことは、使用規則に関する合意であり、本人の意識内の色覚の合意



とは解釈されない。このことは左の図によって明らかであろう。一つの赤という言語信号が個人別の感覚へ入り込み、そのシステムを通して出てきたものをa, bが等しいという合意のもとに、A, B両者共に赤というものを理解したと解釈する。しかし、そこには本人の意識内のつまりCの確認は全くなされていない。この「選択」の上での合意という形態をなさない場合、つまり言語信号が行動の一致という形で確認された場合のみ、「理解した」と解釈されるのが運動学習である。運動学習における言語とは、「意味について語るな、使用について語れ」という現代言語哲学の一般的な標語と異なり（文献 23・61 頁），言語の意味内容の理解が問題の中心となる。実践の場でよくあることだが、よい運動を「選択」する能力はあるのだが、実際はできないということである。言語指示と行動の一致に価値をおく運動学習において、使われる言語形態は、事象に対して固定的につけられた名称ではなく、ある機能をもった言語なのである。例えば、「手を上に挙げる」というある指示を与えた場合、その目的の達成によってのみこの言語を理解したと考えられる。このことは、日常的動作ゆえに誰しも簡単にできる。しかし、体競技のように日常性を超えたスポーツ種目になると、ある別の図式が出現する。つまり、「分かっているけどできない」という場合である。例えば、運動機能語としての“胸を含み、頭部を背屈する”という姿勢は、日常においても可能である。またその姿勢ができていないかを判断することもできる。ところが、運動中にその姿勢がとれるかどうかという点と全く疑問である。多くの選手は、頭部の背屈と共に胸も反ってしまう。このことは、姿勢反射によって生じると説明はつくかもしれないが（文献 5・215 頁），説明をしたところでできるようになる訳でもない。また、その姿勢を保っているもののみが、ある運動を非常にうまくできるとすると、もはやこの問題を避けて通るわけにはゆかない。これを図式的に示すと、次のようになる。運動学習の場合、



A=Dにおいて成果として成立する。B, Cを無視し叱咤激励するか、Bのみを扱い日常性というものに“地”を置き換え、“図”としての現象を確認する場合が多い。しかし一番問題となるのがCなのである。

このCの能力が欠落してしまえば、運動経験の保存は不可能である。このCを外からの助けによって気付かせる方法の一つが幫助である。つまり、運動中という“地”をなるべく壊さないでこの“図”としての現象を出そうとする。しかしここには、また新たな反射が生まれるだけで、他の運動への転用は期待できない。決定的なことは、運動者自らがそのことを修正することである。外力を借りず、自分で修正することに指導者はどこまで立ち入ることができるであろうか。大切なことは、その運動者本人が自ら内部感覚へ転移できる言語を探すことである。言語の使用について語る場合は限られるが、意味について語る場合は、もっと多くの言語が利用できる。例えば、先の例の“胸を含む”という言表を、“背中を丸く”でも良く、胸ということばに対して運動表象がわからなくても、背中ということばに対して運動表象が持て

る場合もある。このことより、運動者の“背中が丸く”あるいは“胸を含んだ”形を示すことができる。現時点で我々が求めているのは言語による運動表象の差異よりも、本人の非日常性という世界での身体図式の拡大なのである。つまり、我々は、性質と対象的方向を同時に固定するという日常性に現象学的エポケーを用いなければならないのである。このことは、フッサールによって以下のように明らかにされている。「同一性質の表象という性質を持つ二つの作用が明らかに同じ対象に向かう作用として現出していながらしかも、その両者が志向的本質全体について互いに一致しない場合がありうるであろう」（文献7.213頁）。このように同じ対象に向かう作用としては、“胸を含む”でも“背中を丸く”でも、同じ現象に向かっているのである。しかし、一方は胸を、一方は背中を動かすのであり、本質的には大きな違いがある。しかし、この本質的な差異を感じるのは、このようなことから自らの身体図式が非日常性という枠の中で拡大された場合であり、より高次のレベルにおいてである。このような経過を経て習得した運動こそ、多くの運動へ転用でき、全て運動経験として保存し、必要に応じて呼び出すことができるのである。運動学習において、特に、体操競技のような非日常的な運動においては、言語というものが日常的な解釈の枠を超えてしまう。このような、本人の感覚と運動を結ぶチャンネルを探すためには、日常的な言語理解では、どうしても無理となる。

## 5. 精神医学と運動学習

ここにおいて、非日常性ということから、安易に精神医学との関連を述べるつもりはない。しかし、何故、精神医学が引合いに出されるかを明らかにしておく必要がある。精神医学における対象者は、常識的な合理性によって構成されている日常性のルールに違反した者たちである（文献13.336頁）。この場合、違反しているか否かの判断は本人ではなく、その本人を取り巻く人たちによって決定される。このような対象者を扱う精神医学では、もはや日常的な先入観を入れることは許されない。例えば、本人の発話一つ取っても、そのことから本人の意思、意識を読み取ることは、日常の発話として扱っている限り、ただ狂人としての感想しか出てこない。医者として、その根源に入り込もうとするとき、精神科医は現象学的態度をとらざるをえなくなる。我々の運動の世界においても、逆位で手足の感覚が消えてしまう者たちに対し、もはや、日常性に支えられた常識というものは通用しなくなってしまうのである。この者たちを対象に、運動を教え、修正するということは、精神科医と同様に現象学的立場に徹しなければならない。この現象学的立場の一致という点で、精神医学と運動学習とは大きな関わりを持つことになる。このことは、実践においてすでに行われているのであるが、指導者が学習者に対しての関係は、同じ一つの事態の「切迫性」に基づいている（文献13.332頁）。患者の切迫した緊急事態における救助を求める願いと、医者の救助の行為との共同作業は、我々運動の学習指導の根底にも流れているのである。このことから、我々が真剣に運動者へ救助の手をさしのべようとする、まず第一に理論と実践の大きなクレパスに遭遇する。そのクレパスへの橋渡しは、もはや実証主義的な橋では届かない。この作業は運動者側から出る橋と指導者側から出る橋との共同作業によって初めて完成するものなのである。さらに、この指導者側から一体どこに橋を掛けるかは、精神科医と同じく“思いつき”なのである。ボスによれば、この“思

いつき”は芸術家的着想であって、好事家のそれではないという。ただし、ここには精神医学でもいうように、医者と患者がこの瞬間に具体的な共同相互存在としてあるという個人的な〈掟〉にも一致したときのみである（文献3.114頁以降）。しかし、この精神医学における“思いつき”は、運動指導の世界に比べて消極的態度しかとれない。つまり、ヤスパースの言うように、ただ患者側から報告されることのみで、本人の中で生じている現象に立ち入らなければならないのである（文献14.8頁）。しかし、運動の世界においては、少なくとも運動者と類似の経験を持つことができる。つまり、その運動者の中で生じている現象を指導者自らが再現しようとしてもよいのである。精神科医が、もしこのような積極的態度をとり、真の悩める共同相互存在になってしまった瞬間から、医者としての立場は剥奪され、一人の精神病患者として扱われることになるであろう。従って、運動の指導者のもつ“思いつき”とは、精神科医よりも明らかに共感的地平に支えられていると言っても過言ではないであろう。この“思いつき”を支えるものが豊富な運動経験、運動知識であり、運動観察力なのである。また、この“思いつき”を行うことが許されるのは、信頼関係に支えられ、「切迫性」に迫られた共同相互存在という関係が成り立ったときのみである。この共同相互存在という関係を成り立たせるために、ビンスワンガーは以下のように述べている。「現象学者が精神病理的体験を分析する場合……彼は患者の言語表現が彼の心の中に生じさせる意味の中へ入り込み、言語によって間接的に示される異常な心理現象それ自体の中をのぞきこもうとする」（文献2.58頁）。運動学習においても同様に、共同相互存在という関係を成り立たせるために、言語によって間接的に示される本人の感覚を覗き込もうとしなければならない。この間接的に示される言語から、本人の中を覗き込むには現象学的態度をとらざるをえないのである。さらに、この具体的な例として、“ヒステリー性不随”という一種の精神病を挙げよう。この病気は身体条件が整っているのに関わらず、ある単純な運動をやることができない。つまり患者は“有機体”すべて正常にもかかわらず、腕も足も動かせない。このことは周囲の人たちの反感を買い、“やりたくない”（Nicht-Wollen）ように見え、“できない”（Nicht-Können）とみせかけているように見える。しかし、これは明らかにヒステリー性不随という病気である（文献4.S.273）。我々の運動の世界にも似たような例は少なくない。運動者本人が一生懸命行っているのに、指導者は非常に不満に思い、“やる気がない”と悪口雑言をたたきつける。まさに、有機体として全て正常なのにできないのは、結局は体力、筋力の問題と短絡的に結びつけてしまう。しかし、そのことによって本当に解決できるであろうか。逆に、体力的にも優れ、筋力も十分あるのにできないのは、どう説明するのであろうか。我々の運動とは、決して部分的な要素の合成によって支えられているものではなく、全体性の中で成立していることを忘れてはならない。まさに、デアヴォルトのいうように、「医者や教育者や体育指導者たちの前に現れる具体的現象は雑多な知識領野の認識を単に寄せ集めたものではとうてい理解できないのである」（文献4 Vorwort）。ここに現象学的態度をとることによって、我々は運動を本当に理解し、教えることが可能なのである。

## 6. 運動学習の対象に対する感覚運動構造

運動を学習するということは、まずその対象となる運動が定立されていなければならない。この対象となる運動の概念が明確にされてこそ、学習というものが具体的に成立するのである。しかし学習対象としての運動の構造体系論の発展に対して、運動の指導法は依然として大きく立ち遅れている。確かに技の構造が明らかにされると、当然その技術というものが浮き彫りになる。例えば、け上りでは切りかえし技術、上昇回転技術（肩角減少技術、握りなおしの技術）などが現在明らかにされている（文献9.330頁以降）。この技術習得の指導法は、その技術になるべくその技の感覚に近いアナログ的運動で取り出し、分習させるという形式をとる場合が多い。肩角減少の技術習得の際、よく長座姿勢から腕を伸ばしたまま、足から手を放さないような動作によって、その技術を習得しようとする。ところが、ここで運動者の意識が上体を倒すことによって副次的に肩角が狭まる場合と、肩角を減少しようとして副次的に上体が倒れるのとは可視的現象として現れるものは同じでも、全く異なる運動の感覚なのである。ここで問題となるのは、この段階をどのように対象者ごとに変化させるかである。つまり、個人の感覚にあわせて、いわゆる図式技術の血肉化の作業が前景に立てられる。現在の指導法においては、このことは指導者の職人芸として扱われてしまう。その指導がここまで入り込めなければ、その指導法理論は臨床の知として実践の場に堪えうるものではない。この血肉化の作業において、そこに共通因子が見い出せなければ、生きた指導法の確立は不可能である。個人の運動感覚の把握の中で、他の形態構造を持つ運動にかかわらず、共通の運動感覚を持つことはよく知られている（文献11.36頁）。また、我々人間は異なった種類の感覚でも、たとえば、視覚と味覚との間でも互に通底しあったり、比較したりすることができる。このことは、感覚の全ての領野を統一的にとらえる根源的な感覚能力、つまり＜共通感覚＞に支えられているはずである（文献21.8頁）。我々が感覚的に共通に生じる、前の変化による運動の感覚の差を例に、共通感覚の存在を明らかにしよう。

## 7. 前の変化における共通感覚現象

まず、具体的な二つの例によって説明しよう。一つの例は、床での、左腕軸の倒立～1/2正ひねり～前転である。この運動には、感覚的に異なる二種類の捌きが存在する。つまり、倒立から1/2ひねる場合、平行棒の“逆倒立ひねり”のような経過を辿るものと（背屈頭位型）、いわゆる、自分の“腕の中にもぐる”というような経過を辿るものと（腹屈頭位型）がある。この両者の感覚は課題は同じであっても全く異質なものである。次に例としてあげられるのが、倒立位での指示語による運動の変化である。普通背屈頭位の倒立の状態で“肩を前に出す”という指示をすると、背中側の方へ、つまり肩角を減少させる方向へ肩を動かす。しかし、腹屈頭位の倒立の状態と同じような指示を出すと腹側へ肩を動かしてしまう。一つの指示語で全く別な運動を引き起こしてしまう例である。これらの現実存在する例では、そこに共通な原因を作っているのが「前」の変化である。

我々が「前」を規定するには、多くの説がある（文献 8.127 頁以降）。体操競技において、身体説と空間説をとることは周知のことであろう。例えば、倒立歩行を例にとると、倒立で前へ歩くという課題に対して、一般的には背中側の方へ歩く。しかし、「前」というのを体の前面が先行するということで解釈すれば、腹側の方向へ歩くことになってしまう。これは視覚によって判断される「前」と、身体によって判断される「前」との差から生じる（文献 22.S. 149）。特に、このことは倒立の状態で腹屈頭位した際に明らかであろう。身体の「前」と視覚の「前」とが一致した場合、何のためらいもなく腹側を「前」ととらえる。但し、手だけは、あつさりをするようになる。このように、我々は「前」を変化させることにより、感覚的な混乱が生じるのである。

ここで、「前」の変化によって第一の例を説明してみよう。左腕軸の倒立 1/2 正ひねり～前転は、倒立位という感覚的には天地が逆転していない姿勢から、前転という天地を逆転する運動とを、いつ一致させるかという感覚上の問題である。背屈頭位型は、前を水平方向に回転させながら 1/2 ひねりをし、つまり、空間説における右方向に視線を移動し前転に入る。腹屈頭位型は、前を垂直方向に回転させながら 1/2 ひねりをし、つまり空間説における倒立の左方向にもぐり前転に入る。背屈頭位型は、視線上の先取りとしては右を見、腹屈頭位型は左を見るのである。視線が右に動くものと左に動くものとが一つの課題として扱われているところに問題を見出すことができる。また、指示語による運動の変化の例は、頭部の腹屈、背屈によって身体の感覚的前が変化し、運動が逆に起こる例である。しかし、腹屈頭位の例において、よくあることだが、どちらの頭位においても背中側へ肩を出す場合がある。“肩を前へ出す”ということを経角減少としてとらえる場合、つまり肩帯の筋感覚によって判断される場合である。特に、背屈頭位の倒立から実験を行うと、このときの肩帯の筋感覚が腹屈頭位の倒立においても残り、“前へ”ということが意識の前景に打ち出されなくなり、肩を出すという肩帯の感覚によって運動が引き起こされる。このことは、特に体操競技に多い例だが、頭部の位置変化程度では、「前」が変化しないのである。また、平行棒のヒーリーの練習において一回ひねりの感覚が生じにくいのは（文献 12.33 頁）、視線上の変化では左右の往復運動になるからである。つまり、視線を意識の前面に打ち出すとひねり戻しと考えられやすい。しかし、意識を肩あるいは足に置くと、この問題は比較的容易に解決できる。このことは、一般にはメルローポンティの二重感覚において証明されている（文献 19.165 頁）。つまり、我々は、二つの意識を自由に換えられるのである。体操競技においては、「前」の変化と相まってこのことがさらに複雑になっているだけなのである。但し、どの場合においても意識は局在化されるのである。例えば、先のヒーリーの場合、左腕を軸とすると、視覚的なものに意識が置かれている場合、倒立から“左を見てから右を見る”というような指示語が適切であり、肩帯に意識が置かれている場合、“右肩で丸を書くように”というような指示語が適切となる。運動者の意識がどこに志向しているかを知らずして運動を教えることは、多くの危険な事態を招くことになる。このことはマイリンクの“ひきがえるの悪態”という物語のなかで、我々はその現実気付かされるであろう（文献 18.S. 51; 43 頁）。運動者本人の意識にない部分を指摘した場合、運動が全くできなくなる場合がある。この運動者の意識の志向性を探る上でも、言語の意味内容を現象学的態度をもって解釈することはきわめて重要である。さらに、そのなかに共通に存在する



感覚というものに注目することによって、運動学習論は大きく転換を迫られるであろう。

## 8. 結語並びに展望

本研究においては、運動学習の現象学的・モルフォロジー的立場から、言語の問題とともに運動における共通感覚の存在を明らかにしてきた。このことを基礎に、共通感覚に支えられた新しい構造体系論の確立が急がなければならない。物理学において、客観的世界に対応される絶対的な真理の体系が許されなくなったことと同様に（文献16.116頁）、運動の世界でも客観的世界はもはや絶対性を主張できなくなってきた。ビンスワンガーは、「精神分裂病にあっては、自己の向上と墮落という垂直的な体験方向が、着実な立脚点にねざして実践的な経験を拡大していく水平的な体験方向にくらべて一方向に優位を占めていることを指摘し、これを“人間学的不均衡”と名づけた。自然からの離脱独立、個別的な自己存在の実現、合理性の追求など人類の文明に全面的に参加しようとする努力はすべて、この垂直軸の方向に関係している。これを補うべき生命的存在感、実践的な勘、自己の立場の確保など水平面がこれに伴わなかったときには、そこに分裂病性の狂気への大きな危険性が生じる。」と述べている（文献13.370頁）。運動研究においては、垂直軸の研究の発展は比較的順調に進められているが、水平軸への研究は非常に立ち遅れを示していることは本論の指摘するところである。運動学習論も水平軸の地平において研究が深められることによって、実践に生かすことのできる、つまりパトスの知としての指導法の基礎が構築されうることを提言しておきたい。

## 引用参考文献

1. アリストテレス／山本光雄訳：アリストテレス全集 15 政治学 経済学 1969 岩波書店
2. ビンスワンガー／荻野恒一他訳：現象学的人間学 1976 みすず書房
3. ボス／笠原 嘉・三好郁夫訳：精神分析と現存在分析 1981 みすず書房
4. Buytendijk, F. J. J.: Allgemeine Theorie der menschlichen Haltung und Bewegung 1956 Springer-Verlag
5. 福田 精：講座心理学 3 感覚 1973 東京大学出版会
6. ゴールドシュタイン／西谷三四郎訳：人間——その精神病理学的考察 1957 誠信書房
7. フッサール／立松 孝・松井良和訳：論理学研究 3 1979 みすず書房
8. 金子明友：体操術語における運動方向に関する研究 東京教育大学紀要 4 巻 1964
9. 金子明友：鉄棒運動 1984 大修館
10. Kaneko, A.: Prolegomena zur Methodik der sporttechnischen Neugestaltung 筑波大学紀要 8 巻 1985
11. 金子一秀：技の形態発生における構造体系論的研究 筑波大学修士論文 1985
12. 金子一秀：体操競技における技の概念規定に関するモルフォロジー的研究 東京女子体育大学紀要 22 号 1987
13. 木村 敏：分裂病の現象学 1985 弘文堂

14. 木村 敏：精神医学における現象学の意味 現象学年報2 1985 北斗出版
15. 岸野雄三：“運動学の研究法”序説運動学 1980 大修館
16. 岸野雄三：“スポーツ科学とは何か”スポーツの科学的原理 1987 大修館
17. 松田岩男他：運動心理学入門 1987 大修館
18. Meinel, K.: Bewegungslehre 1960 Volk und Wissen Verlag  
マイネル／金子明友訳：スポーツ運動学 1981 大修館
19. メルロ・ポンティ／竹内芳郎・小木貞孝共訳：知覚の現象学 1970 みすず書房
20. ナイサー／古崎 敬・村瀬 旻共訳：認知の構図 1984 サイエンス社
21. 中村雄二郎：共通痛覚論 1985 岩波現代選書
22. Nickel, U.: Angewandte Bewegungslehre 1983 Karl Hofmann Verlag
23. 坂本百大：心と身体原一元論の構図 1986 岩波書店
24. Schmitz, J. N.: Bewegungslernen im Sportunterricht Beitrage zur Lehre  
und Forschung im Sport Band 40 Karl Hoffmann Verlag
25. シュトラッサー／徳永 恂・加藤精司訳：人間科学の理念 1980 新曜社
26. ワイゼッカー／木村 敏・浜中淑彦訳：ゲシュタルトクライス 1975 みすず書房

## Zur Problematik des sensomotorischen Lernens im Sport vom phänomenologisch-morphologischen Standpunkt aus

Kazuhide KANEKO

Im Rahmen der Sportwissenschaft in den letzten Jahren ist das sensomotorische Lernen nicht zuletzt deshalb als Forschungsgegenstand von besonderem Interesse, weil es vorwiegend unter kybernetischem Aspekt als Regelkreismodell zu verstehen ist. Jedoch kann auch das kybernetische Regelkreismodell das Gesamt des menschlichen Bewegungsphänomens nur verkürzt oder reduziert fassen, gleichsam nur als Bild einer möglichen rationalen Erfassung oder Verdeutlichung anbieten, weil es die je gegebenen Unbestimmtheiten des Menschlichen im vielfältigen Spektrum der personalen und situativen, vorallem aber das Moment der Freiheit einsichtig nicht mit zu konstituieren vermag. Das menschliche, wie auch immer man dieses verstehen und inhaltlich fassen will, versperrt sich einfach gegen jede Art von "Maschientheorie" im Sinne Buytendijks. Erläutet im seinen Buch "Das Menschliche", dass das wesentlich Menschliche der menschlichen Bewegung durch eine wirkliche Geschichte des Subjektiven-Personalen, d.h. von Wollen und Erleiden, also vom Bewusstsein im Sinne von Selbst-Bewusstsein, d.h. von der Erkenntniss bedingt ist. Infolgedessen sollen auch in das sportlichen Bewegungslernen die Grundbegriffe wie Subjektivität, Intentionalität und Bewegungsbewusstsein inklusive der vitalen Phantasie im Sinne Buytendijks eingeführt werden vom phänomenologisch-anthropologischen Standpunkt aus. In diesem Wege haben schon die Psychiater wie Binswanger bzw. Boss bekanntlich grosse bemerkenswerte Erfolge. In dieser Abhandlung sei die Wichtigkeit des Gemeinsinnmässigen d.h. "sensus communis" im Rahmen des sensomotorischen Lernens in den Vordergrund gestellt. Vor allem sei sie durch die konkreten Beispielen von Bewusstsein der Bewegungsrichtung verdeutlicht, wobei es sich um die Intentionalität aufgrund des Gemeinsinnmassigen handelt, um das Erlernen der sensomotorischen Fertigkeiten erfolgreich zu garantieren.